

千代田 謙 著

西歐自由主義史学の研究

酒 井 三 郎

一

史学史は、千代田氏によれば、歴史的自己反省である。はたしてしからは、それは特殊史として歴史の側面的研究でなく、あらゆる歴史研究者が、留意しなければならぬものである。すべての史家は、かくして常に史学史的態度を棄てることはできない筈である。にも拘らず、現在わが国で史学史的態度は意外に顧みられておらぬということは、わが国の史的意識の低さを意味するものではないかろうか。とりわけ西洋史学の研究において、好事家や職人気質のような重箱の隅をほじくる作業が、専門的研究の名のもとに流行しているのではないのか。なるほど欧米人に劣らぬ業績を挙げるといふことは、容易なことではないとしてもあまりにも末梢的な——それを歴史と呼ぶことをせよ、かと思ふような——仕事が集み重ねられていないであらうか。

千代田氏は、坂口昂氏が早く試み、後に原隨園氏がギリシア史においてこれをなした西洋史学史をその研究対象とし、一九三〇年ごろからまさに四十年、終始一貫、史学史とともに進んだ。一

九三五年『西洋近世史学史序説』を、一九四五年に『啓蒙史学の研究』（第一部概論篇、特論というべき「フリードリッヒ大王の史学」は組版の半ばにおいて戦災で失われた。）を、一九六〇年に『第一九世紀ドイツ史学史研究』を世に送ったことはひとの知るところである。而して今やここに紹介しようとする『西歐自由主義史学の研究』があらわれた。この第四のものについて述べるにあたって、前三著には殆どふれないであらうし、またその他の諸書にもふれないが、氏が広島大学退官の際の自費出版『史学概論と精神史特講』（一九六三年版）は、内容の關係から多少ふれざるを得ない。

千代田氏の史学史上の業績は、その四十年にわたる蓄積の故に並々ならぬものがあり、欧米の史家の業績にも劣るものとは思われない。例えばふるくカミエール・ジュリアン (Camille Julian, *Extraits des historiens français du XIX^e siècle*, 1896) など、ニュー・グーチ (G. P. Gooch, *History and historians in the XIX^e century*, 1913) など、カトリック・リッター (M. Ritter, *Die Entwicklung der Geschichtswissenschaft*, 1919) など、フーター (E. Fueter, *Geschichte der neueren Historiographie*, 1925) など、インの史家、ブラック (J. B. Black, *The Art of History*, 1926) など、トンプソン (J. W. Thompson, *A History of historical Writing*, 2 Vols., 1942) など、リン・マン (R. G. Collingwood, *The Idea of History*, 1946) などの英米史家をはじめ、この『西歐自由主義史学の研究』にとりあげられたクローチ、マイネケはふれないとして、近くはポウ・マックス (F. M. Powicke, *Modern Historians and the study of History*, 1955) など

に比して遜色を見ないのである。とりわけ比較史学史(千代田氏は各国史学を比較してそう呼んでいるが、わたしは個々の史家の史叙なり、史観なりを比較する手法をもそう呼ぶ。単なる史家の伝記ではない。)の叙述にいたっては、西欧史家といえども、彼の墨を辱すること難いものがある。

千代田氏は一九六〇年「比較史学史の一試図」(広島史学研究會三十周年記念論叢所収)を発表されたが、わたしのいう比較史学史は前述のごとくヨーロッパ内のそれも含むものである。一八五〇年秋イギリスのギリシア史家グロートは、その夫人宛にアナバシスを終り、ツキディデスと離れることを書き送っている(六二頁参照)。これは執筆する歴史叙述家の感懐の一つに過ぎないもので、ギボンの Autobiography における一七八七年六月二十七日の条と同じくいわば伝記に属するものであるが、本書に後続(六二―三頁)のモムゼン・ドロイゼン・ギボンとの比較になると、いうところの比較史学史にはいって。千代田氏の本書は、いわば比較史学史でもある故に、もっと詳しく筆を継ごう。ビスマルクがトライテケ、あるいはラサールと比較され(三一―二頁参照)たり、アメリカ革命とフランス革命が比較(一七四頁)されることは一般に行われるところである。トクヴィルがランケと比較され(一五二頁)、ランケがギゾーと比較される(九五頁)ところになると、著者の巾の広さに驚くほかはないが、アクトンが博識で、クロチエが多方面で、トクヴィルが透徹であった、という評言(二六六―二七一頁)とともに、近づきたいものとも思われぬ。しかしながらトクヴィルの『旧制と革命』を、シュタインの『社会動向史』と比較して(一五八頁以下参照)、史観か

らさらに突きこんで歴史学における本質的問題、「自由」と「必然」「階級闘争」などの問題に展開してくると、まさに千代田氏の独壇場というべく傾聴に値するものが頗る多い。

むしろ比較史学の叙述はこれにつきるものでない。ギリシア歴史のそれ(六三―四頁)、レストラシオン期におけるフランス革命史観の展開、さらにシュタイン・トクヴィルとマルクスの立場、もしくはトクヴィルとブルクハルトの現代観など(第一編第三章参照)少なからぬ示唆を受けるものがある。とりわけ比較史学の頂点として見るべきは、本書の目標がそこにおかれているところのクロチエとマイネケとの対比であった。

二

南イタリア育ちのB・クロチエと北独生れのF・マイネケ、年令の差五才、まさに比較の好材料であった。のみならず兩人とも歴史主義(歴史主義は主張する学者によって異なる内容をもっている。例えば本書二五四―五頁参照)の重鎮である。著者はまず兩人のそれぞれの生いたちを辿る。ここに兩人の精神構造の差異があらわれてきて、同じ時代・同じ西欧文明を呼吸しながら同一方向を進み得ないということが、人間の特殊性をつくり、歴史がここに始まるのである。一八八三年クロチエは天災によって父母と妹を喪って孤児となる。マイネケは大学生としてドロイゼン・トライテケ・ジーベルおよびディルタイの教えを受ける。ともにランケの系統に属し、ここにマイネケは精神史学の進路に定着する。その間クロチエは、精神の自由と史学の問題について、ラブリオラ・マルクスおよびヘーゲルを研究し、かつ批判する。

したがってクローチエは精神史学にゆきついたにしても合理主義の体系を棄てなかつた。しかもクローチエのマルクスレーニン主義批判は年とともに冷酷にさえる。ヘーゲル逆立ちの譬のごときマルクスの放言は、軽信者を誤らせる妄語で、觀念の作用を不当に軽視して物質万能の自然主義を逆転し、宿命・決定論に陥らしめ、不可避必然の歴史法則を迷信させる危険があるとして、史的唯物論・労働価値学説・剰余価値説、利潤遞減説等々を批判した。(六一八〜六二四頁参照)。かくて「もし上来批判し来たところの短所を爾正せぬなら、マルクス主義は、極左ヘーゲル主義の僻論に魅入られた新しき默示録の予言に類するであろう。クローチエにとつては最も非哲學的で、したがって彼の科学からも離れようとする一種の新興宗教となろう。」(六一一〜一二頁)と。クローチエがマルクスを卒業した頃、マイネケは史的唯物論とは全く別の世界観・人生観に属するドイツ理想主義の流れの中で、ウィンデルバンド特にリッカートの自然科学的方法と歴史・文化学的方法の峻別に共鳴し、歴史学の自主性を己が精神史の領域に發揮しようとした。マイネケは実践を考へるが、クローチエとは異なる。マイネケにあつては実践の色調を帯びるといふても、思想的觀照思索と政治的現實行動とは區別されるべきだといふ意識が強く作用し、学究と政治家と一応區別されねばならぬとした。(六二四〜六二七頁参照)。かくて「ピスマルク特にヴィルヘルム二世の積極活躍主義において狂い出した機械的運動、そうした積極行動主義を許すことを極度に嫌つたクローチエにとつては、マイネケのこうした態度はやはり権力と妥協する独史風の、否、独民族の神秘に溺れる理解主義の薄弱さとして唾棄すべきものであつ

た。」(六一七頁)

第一次大戦が起り、敗戦国ドイツと回復されざるイタリアとは、それぞれマイネケとクローチエに影響する。その影響を述べたあと、千代田氏は兩人のゲーテ観を展開する(六三三〜六四二頁参照)。この中における著者の文学論は、グロート叙述の際における中期ウィクトリア時代の文学をとりあげた場合(七五頁参照)とともに、著者の視野の広さをあらわしたもので、わたしのいう文化史(政治・経済も文学も思想等々をも含めた史述)の叙述をなすものであつて、そのことから問題にすることができ、ここでは省略する外はない。

さて著者による兩者の相違は、以下のごとくいわれている。すなわち「マイネケとクローチエとは相近くしてしかも紙一重の喰い違いというか、次元の違いといふべきか、とにかく合致しないものがある。マイネケの史学は、ブルクハルトに對するニーチエの所謂一歩手前で立ち止まる歯痒さではないけれども、此岸にしばし佇んで底知れぬ深秘なる激流急湍を渡るべく覗う。クローチエの史学は彼岸に押し渡る準備を整えて渡河を敢行する発進の利那までを含む、渡らねばならぬのである。此外に兩者の袂を別かつ大切な点がある、と譬えられよう。クローチエ式に実践は經濟政治不二の活動とすれば宗教・文化は、極めて微々ではあつても極言すれば、なお若干の孤独性と静寂性を残すといえよう。ゲーテは文化人として極言すれば悠然と政治に遊ぶことができた。古きよき時代に恵まれた天才を祝福すべきであるように観える。」(六五四頁)と。

かくして千代田氏の結論は、いつものごとく極めて控え目であ

るが、どちらかといえば、クローチェに自由主義歴史学の正統性を認めている（六八〇頁参照）ようである。第二篇第八章に「歴史主義の二途」としながら、第二篇の題目を「西欧自由主義史学の最高峰」として副題を「ベネデット・クローチェの史学」とした所以であろう。

三

この書は科学研究費の補助によるものである。科研補助による助成は——成果刊行費による助成で出版する場合も——期日に拘束されて平素の思うところを尽し得ない場合が少くない。頁数の超過に気をつかったものは、わたしひとりの経験ではあるまい。

おそらく著者も補遺の段階を一篇として筆を振いたかったものと想像するのは僻目であろうか。しかし幸にこのあたりについては千代田氏の『史学概論と精神史特講』の「第一部わたくしの史学概論」第三「史学の展望」に稍詳しい。序ながらこの退官記念論集は小冊子ではあるが、無視することのできない著述であり、本書と表裏一体となすものであることをつけ加えておく。前記グロート・トクヴィルにしてもシュタインにしても、またアクトンをとつても、それぞれ単独の論文があり、(グロートは「西洋史研究」七、そしてアクトンは広島大最終講義案に加筆したもの)、本書への架橋をなしている。とくに本書で書きおろしたものはほかならぬベネデット・クローチェである。(もつともこの第二編の最終章をなす「歴史主義の二途——Benedetto Croce と Friedrich Meinecke——」は、原稿が出版所にある頃と思われる一九六九年一

〇月一日、「広島商大論集」のために送られて第一〇巻第一号の巻頭論文となっている。)、この意味においてもクローチェこそは、本書において重要なものとして扱われるべきものである。

この書きおろしとしてのクローチェ・マイネケの条は二つの意味で特筆しなければならない。

一つは千代田氏の中心的研究領域である比較史学史、とくにわたしなりに解釈した氏の比較史学史的研究の頂点に位置するものであることであり、他はこう考えるのである。『史学概論と精神史特講』では、「普通史としての史学史」の題下に次のごとく述べている。「……例えばベネデット・クローチェの主張する真の科学的史学は哲学的であり、真に具体的な哲学は科学的な史学でなくてはならぬ。真正の科学——真理の探究は、歴史的な人間の自由に関する事であって、創造をみとめぬ自然の知識は、結局功利的便宜を図る技術に帰するから、それだけでは真理への道とはいえぬ。というヴィヨの思想をついだ考え方は、期せずして遙かに無意識的にはあるが、自然研究よりも人倫の道に傾く風ある東洋の思惟をも連想せしめるところもあって、確かに一理あるものと思われる。しかし、この多義な概念については此処でより深く立入る暇をもたない。」(『史学概論と精神史特講』五七頁参照)と。すなわち六三年の退官記念論集にのこしておいたものの再考がここになされる筈である。かくしてこれに深く立入ったのが、本書第二編の「西欧自由主義史学の最高峰——ベネデット・クローチェの史学——」(二九七〜六八〇頁)で、長さにおいて、内容において、まさに本書の真髄をなすものであることである。クローチェとマイネケの比較についてはすでにふれたところで

ある。ここでとくにわたしが強調したいのは、次のことである。

すなわち千代田氏が史学史研究の途を踏みだして四十年、その長い遍歴の後、遭遇した数多くの史家群像の中から、氏は探し求めていた無二の知己を得ることができた。それはマイネケよりもむしろクローチエであった。ベネデット・クローチエの史学、それは千代田史学とまさに軌を一にするものであった。

千代田氏が一九六三年『史学概論と精神史特講』を公にした時、すでに彼の史学はほぼ大成していた。しかもクローチエを深く読むにいたって、ますます一致するところ少なからぬことを発見した。一九七〇年『西欧自由主義史学の研究』の成るまで——蔽密にいうと一九六九年秋以前——に氏がクローチエに傾倒したことは想像にかたくない。

一九五二年一月二〇日クローチエがナポリで歿して二〇年、かすに余命をもつてし、また千代田氏のクローチエを知ることがもう少し早かったならば、東西の握手がどんな結果をもたらすかわたしは見果てぬ夢をおもうのである。

四

しからばクローチエの考え方、少くとも千代田氏のそれと一致する精神哲学とそれに基づく史学理論はどんなものであろうか。

彼はいう「クローチエ自身もいったように、自由主義は極めて実際の便宜主義とさえ見えよう。それは実現可能の理念を以て冷徹に現実を照らし、それに最も適した方法を遂行すべく、反省、批判する。されば歴史は自由の実現する過程に外ならず、い

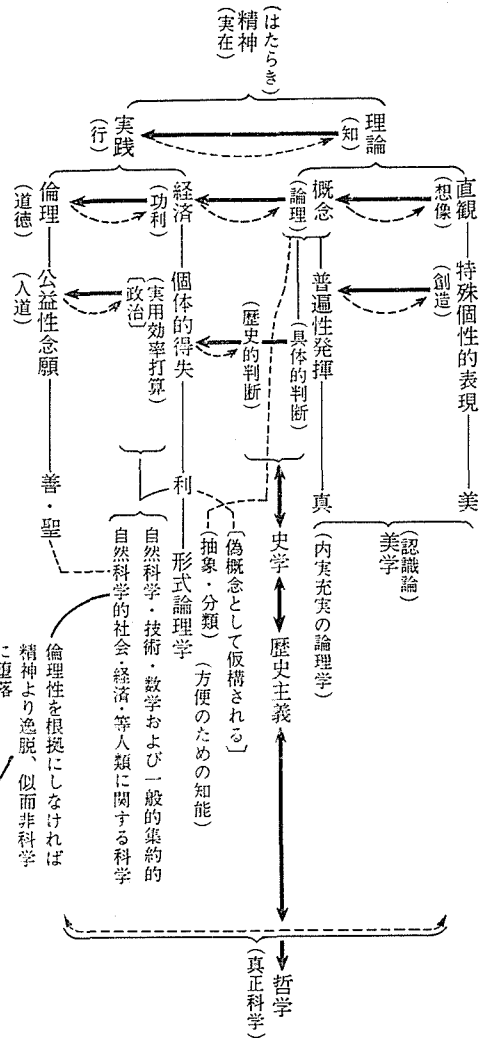
精神なのである。クローチエはどのようにしてこうした自由主義を体系づけ、歴史主義と一如のものとしたのであろうか。これまでの概念をさらに詳細に考察して、その具体的な構造と機能とを理解したい。いまクローチエの龐大夥多の論著のうち、限られた若干篇を辿ることによって、この偉大な自由主義思想家の現代的意義を、史学史的視角に限り、垣間見ようとする。みずからはからざることの甚だしきは、断るまでもないが、わたくしの史学史巡礼の悲願における本山の一寺としてやむにやまれぬものを覚え、ずいられない次第である」(三一七〜八頁)と。謙虚にクローチエにうち向かう著者の姿を見るようである。

いうまでもなく、クローチエの史学に関する議論も史述も、彼の哲学体系を離れてはあり得ない。ここに史学Ⅰ哲学Ⅱ科学という彼の独得の理論が根底にある。クローチエの独自の発想として、個別多様の個性的直観が普遍妥当性を發揮して概念となり、理論的認識を達成するとともに実践行動の機が熟するので、目的と手段とがまず明確となり、目的到達の効果能率が重んぜられ、広義経済的活動がはじまる。この広義経済に含まれた功利的技術・自然科学的態度に止まらないで精神発展の本領である普遍妥当性にいたり、人間の実存を完うするには当然倫理的次元にいたらねばならぬといった絶対観念論によるものである。それを千代田氏は次のごとく図式化している。(三二〇〜三二四頁)

氏はクローチエとともに一元論にたつ。千代田氏によれば、心と物、精神と物質の二元とするのは迷妄である。万物の世界と自分自身との実在を定めてかかるのは、自分がそう想うことであつて、思うことの外に万物の世界があるのではない。クローチエに

よれば、自然主義・実証主義・唯物論などは主体である精神作用を抽象した結果、仮定された物自体が、その抽象作用を営む精神を派生するという逆の考え方で、逆立ちしているものである。かくしてクローチエはヘーゲルの観念主義は合理的にきびしく批判されたマルクスの実践主義に連るべきであった。かくて第一九世紀自由主義の精髓が遺産として現代の生産に寄与するというわけであった。(三二九〜三三〇頁)

千代田氏は引き続き精神哲学の体系を纏説するが、その中



「(三四五頁) 次第で、本末を誤った俗見に墮してはならないのである。」

図式でも見られるごとく経済は実践活動の端をなすものであるが、主我・我利の行動で、幼稚な人達によく見られる。マキアヴェリ
のチエザレ・ボルジアやシェイクスピアのイアゴだ、とクローチ
エはいっている。ところで経済という技術的活動は、生産・労働・
資本・流通・消費等の狭義の経済行為のみでなく、政治的な領域
は勿論、狭義の文化的活動や広義の宗教生活などの面でも、それ

二つ程拾うことに止めよう。まず一つはヘーゲルの弁証法についての「区別」と「反対」との峻別である。すなわち反対から区別が生ずるのではない。区別は精神科学と自然科学のごとく、いわば両極性的相違の性格を帯びるものであって、一元論の両極相補の周行が考えらるべきである。クローチエによると、「偉大なヘーゲルでも、この区別と反対との混同に陥った憾みがある」

が、功利性を前景に立てれば、経済となるわけである。経済は元来個人的欲求に発するものであるが、それが社会的体制となる場合は、必ずしも自由放任経済に限られるわけではなく、人間の自由が確保される上に必要な条件・状況に依りて実現する筈なので、一定の型を設けることは現実的でない。経済が倫理化される道筋は多様であり、現実の状況に即するので、クローチュは、決して第一九世紀的放任自由経済や資本主義に固執するわけではない。彼は経済的自由主義と、その克服・超越を含む倫理的自由主義とを区別して、経済は当然倫理に帰せずには済まないことを力説する、と。

技術学としての経済学も、真正の技術科学的性格の限界をかちうするためには、哲学的反省・批判を加え、通過して、その性能や限界をしかと弁える必要があることになるわけである。何故の経済か、という人生・文明の意義に連なる愛知の精神が、究極的には生活技術や技術学を指導すべきである。

かく幾多の論議を展開してくるのであるが、要は図式を見ることのできる。ただ図式はあくまでも図式に過ぎないものであることはいうまでもない。

五

書評というものは、大体において提灯をもつものである。しかもち過ぎてはいけないので、ところどころ苦言を呈するのがならわしになっている。考えてみれば提灯もちによって本体の光が薄くなるような書物なら、出してもらいたくないのである。

この著者がトクヴィルについて述べた条に「……トクヴィルは、

いかにもフランス思想家らしく、抽象に秀でながら抽象的範疇を好まず、具象の史実を通してのみ普遍的な理法の直観に達する。そしてそれはモンテスキューやバークやスタール夫人やティエールやミニエ、カーライル、ミシュレ、ルイ・ブラン、ラマルティエス等諸多の文献に臘渉しつつも、博引傍証の編纂的推論に慊らずして、主として根本史料に直接する実証的研究を庶幾した。」(一六四頁)と。この言葉はすっかりそのまま著者に呈上してよいものと思われる。ただ嫌らなかつた博引傍証が決して千代田氏になかつたわけではなく、却つてその多いの気がつく。たしかに博引傍証は古い形の史叙の進め方であろう。しかし、馬車馬のごとく坦々たる一路を駆けゆくのが歴史叙述の唯一の途ではあるまい。「六昌十菊」(一〇二頁)、「パスカルの葦」(一四七頁)、「換骨奪胎」(一一一頁)などとなると若い読者は苦しむものがあるが徒らなるベダンティクでもなければ、ひとりよがりでもなく著者の該博な知識の自然の露呈として許さるべきであろう。グロートのリュコルゴス伝の記述(三九頁)、同じくベリクレス評(五六頁)、さらにフェステル・ド・クランジュに因んだ古代社会の研究(一八六〇年代)の記事などすべてこれである。

序ながらわたしの希望を述べることが許されるならば、立論の基礎となつた文献については、いまだ少し詳しくほしいということである。いうまでもなく章末に多少の補注はついているが、簡略に過ぎるのである。あの歴大な論著の根本史料の出典を明らかにすることだけでも容易ならざることである。まして根本史料でない文献を羅列することは、到底煩に堪えるものでない。著者はすでに七十二才であられるから、氏にその労を望むものでないが、

他日機会を得て若い学者に、その苦勞をわけてもらいたい度ことである。わたしがそれを痛切に感じたのは二一〇頁の「モルガンを最新科学的として採用した唯物史観側がこれに反対するのは、例えばウィットフォーゲルの如き、その一例としてあげ得る所であろう」という出典である。同じことは、A・コッパン(三五頁)につけてもいえる。およそコッパンには少くとも

- ① Aspects of the French Revolution.
- ② Edmund Burke and the Revolt against the Eighteenth Century.

③ Rousseau and the Modern state.

④ A History of modern France, 3 Vols.

等々のどれからの引用であろうか。しかしこれも自らの勞を省いて著者から多くをもらおうとするわたしの懈怠の心であるかもしれない。

六

近代の歴史学を問題にする場合、時代背景としての資本主義社会と史学理論としての唯物史観を除外して論ずることはできない。それはマルクス主義を好むと好まざるとに拘らず、史学研究者の義務といわなければならない。もっともいふところの意味は、マルクス主義の信者になることではない。千代田氏の従来ものとされた諸書にあっては、経済関係の叙述が極めて少い。まして史的唯物論ないしはマルクス主義について聞くことは少なかった。それにも拘らず、氏の第四の名著『西欧自由主義史学の研究』においては、マルクスについてふれるところ五〇ヶ所を下らず、すでに

述べたように学説としてのマルクス理論のみならず、生産関係・勞働問題・階級闘争・実践等々について言及しているということはどうしたことであろうか。今までの千代田氏の論述からは、想像もされなかった飛躍を見るのである。

右に対する理由として考えられることは、およそ次のごとき三点が想定される。

- (1) 主題の時代が世界経済発展の時代であって、いわゆる資本主義の最終段階に進みつつある時代であった。されば経済史的考察、とりわけマルクス主義経済の理論を除外しては、歴史を考え、叙述することができなかったこと。

(2) クローチエの史学が、まずラブリオラから出発して、マイネケと異なって、ヘーゲル・マルクス・レーニンなどの批判が進められた。このことはクローチエの研究とともにマルクスなどの研究が避けられぬものであったこと。

(3) それらとは関係なく、否、関係ができたとしてもそれは後のことであって、千代田氏自身その史学樹立のために経済方面の輕視を不可とし、マルクス主義の史学理論を、それを排除すると援用するに拘らず、一応研究対象としてとくんだこと。

そしてこのためには早くも一九六〇年以後、おそらくは一九六三年著者が広島商科大学の学長として赴任した機会が捉えられたと見られるのである。

わたしはそのいずれとも決定する史料はもち合せていない。あるいは強弱の点はあるけれども、全体であったかも知れない。さてわれわれが、千代田史学について常に印象を受けたものは、

同じ精神史としてもむしろマイネケ的であった。『史学概論と精神史特講』においてもその傾向は看取される。しかしながらマイネケ的精神史学は、現代の社会経済史編重の時代にあつては、自らを主張するのにはあまりに弱すぎる。これを強硬にうち出してゆくためには、経済史学とくにマルクス主義経済学と戦い、それを超える必要がある。ここに本書『西欧自由主義史学の研究』出来の意義があり、さらにまた千代田史学大成の意味でもあると思う。

しかしながらマルクス主義史学を超克することは容易の業では

なかつたであろう。この峻険は打ち越え難きものである。七十二才の氏がこの困難なる作業をやつてのけるのには絶大なる決意が必要であつたと思う。「後記」によれば氏の健康も十分でなかつたことが読みとられるのである。このためにベネデット・ニコローチェ氏はとつてはまことによい伴侶であつたに違いない。

終に先輩の著書に対して批評を敢てした非礼を許されるところも、著者のいよいよ加齢あらんことを祈るや切なるものがある。

(A5判 七五一頁 索引一六頁 昭和四六年三月 並紀書房刊 定価四、二〇〇円) (立正大学教授)